いるらしく、最初は一人だったが、ブルターニュからの初老の夫婦、初老の母と30前後の娘の親子、それに、もう一人初老の男と最終的には行動を伴にしていた。別のフランス人に英語で通訳してもらったところ、「目標に近づくにつれて、ゆっくりと歩こう」ということだったらしい。

「悲しいことだがこの旅も残すことあとわずかになってしまった。長い間苦楽を伴にしてきた我が友よ、聖地に着けば、それは喜ばしいことだが、我々は離れ離れになり、それぞれの生活に戻っていかねばならない。現実にもうすぐ手が届こうとしている。我々は夢から覚めねばならない。それは何と言う悲劇なのだ。今できる唯一の方法は、我々の歩みを止めるのではなく、それを遅延することしかない。」

さながら映画俳優のように、大袈裟なジェスチャーで、声高らかに雄弁に喋っていたので、上のように喋ったのだろう。その場の雰囲気からの作り話である。

若いアメリカのカリフォルニア娘も、同じ日に似たようなことを言っていたのを思い出す。アフリカのゼネガルで平和部隊として二年半働いていて、この巡礼を終えると、故郷に帰ると言っていた。ホームに帰り、両親に会いたいと言う欲求とアフリカでの生活を含めた、この旅を終わらせたくないという欲求との葛藤に悩んでいると。

70歳のオランダ人男性が、ポツリと漏らした言葉が印象的だった。

「いよいよあと三日か」

カサノバのベルギウムでのことである。宿泊客の最大収容人数が20人で小さく、ちょっとルートのサイクルをはずした所である。宿泊者も少なく、それぞれがさわやかなガリシア地方の風を浴びながら、本を読んだり、洗濯をしたり、居眠りをしている、午後の一時。彼とワインを飲みながら話をしている時のことである。誰もが巡礼の終わりを意識し始める時期である。

筆者も多くの巡礼者がするように、サンテャゴの手前、13km ほどの小さな村、ラバコーリャ(Labaclla) で宿泊した。その意味は「尻を洗え」。昔の巡礼者たちは、大聖堂に着く前にここで体を洗ったのである。ここを朝早く出発すると、正午に大聖堂で行われる、巡礼者のためのミサに参加することができる。朝宿泊所を出るや否や、雨がぱらつき始めた。やがて雨は本降りになった。サンテャゴの街を見下ろすことのできる、モンテ・デル・ゴソ (Monte del Gozo) では深いもやと雨で何も見えなかった。この「歓びの丘」で巡礼者たちは始めてサンテャゴを目にするのである。昔は一団でやってきた巡礼者たちは、長い間待ち望んでいた目標を一足先に見ようと競争して丘の頂上に駆け上がったのである。この丘で休息していると、オーストラリアの老人が後からやって来た。

「サンジャン・ピエ・ド・ポーを一ヶ月前に出発する時も雨、サンテャゴに到着する今日も雨。とても悲しい。」と言って、もやの中に消えていった。

雨は止む気配は全くなく、むしろ強くなるばかりである。スキーのポンチョを雨具の代用にしているが、役に立たない。身体中がビシャビシャである。こんな時に励みになるのは、聖地を目指している同じ巡礼者の姿である。「雨は再生の象徴。過去のすべてを洗い流してくれるから有り難い」という、合理化で自分を元気づけて歩いた。

6　聖地到達以後

日常生活への復帰を考える、旅の終わりを実感をする時期。コンポステラを手にし、大聖堂（カテドラル）で正午に行われる、巡礼者のミサに参加することで、巡礼の達成感を味わう。そしてその後に襲ってくるのが虚脱感である。「明日からは歩かなくてもよいが、でももう歩くことはできない。」という複雑な感情が支配する。そして、今までは大丈夫だった身体が変調をきたす。筆者の場合は、荷物を担いでいないのに、やけに肩が凝るのである。それに歯にかぶせていた、金属が取れてしまった。精神的な安堵の後には、何らかの身体上のトラブルに遭遇するようである。

巡礼中に何人もの人から尋ねられた。

「フィニステレには行くの？」

サンチャゴから更に西に85キロ。三日の行程である。歩いて行く巡礼者はごくわずかである。筆者が巡礼中に絶えず顔を合わせることで、知り合いになった人々が十数人いたが、フィニステレまで行くといっていたのは、カルフォルニア娘一人だけだった。バスが一日二便出ているので、それ